

# 本多庸一の神学教育とキリスト教教育に関する研究 —青山学院院長初期（1889—1893）の実践を中心に—

佐々木 竜太

## 1. はじめに

2012年は、日本メソジスト教会初代監督の本多庸一召天100周年記念の年であった。本論文において筆者は、ここにあらためて本多庸一の生涯とその功績を振り返りつつ、特に神学教育とキリスト教教育論に焦点を当て、その特徴を見出すことを目的とする。

### 1-1. 先行研究の検討

本多庸一は、1848（嘉永元）年、津軽藩の重臣の家に生まれ、青年時代は藩校稽古館にてエリート教育を受けた。そして横浜遊学中の1872（明治5）年（キリスト教禁制の高札撤廃以前）、23歳で精神的支えをキリスト教に求め宣教師J.H.バラより受洗した。弘前に戻り弘前公会（後の弘前メソジスト教会）を設立し、伝道活動に励むとともに東奥義塾第二代塾長（1874～1883）や青森県議会議員・議長を務めた。アメリカ遊学を経て青山学院第2代（日本人としては初代）院長（1890～1907）に就任。その間は、「教育と宗教の衝突」事件や「明治32年文部省訓令第十二号」問題など、天皇制国家主義の台頭に伴いキリスト教主義学校が苦境に立たされた時代であったが、本多はそうした問題に実践的に関わり、解決を図るのに尽力した。1907（明治40）年には、メソジスト三派

---

<sup>1</sup> 本論文は、日本ウェスレー・メソジスト学会（2012年9月10日、於日本基督教団銀座教会）での研究発表を加筆、修正したものである。

が合同したことを受け、日本メソジスト教会初代監督（1907～1912）に就き、日本はもとよりアジア、ヨーロッパなどでも精力的に宣教活動を行った。1912（明治45）年、伝道旅行中の長崎にて客死、63歳の生涯を終えた。

このように日本のキリスト教と教育の普及・発展に深く貢献した人物である本多は、明治期の日本キリスト教史・思想史研究の通史的文脈において、新島襄、井深梶之助、植村正久、内村鑑三らとならび、頻繁に登場する。

本多の先行研究としては、彼の生涯を辿りその実践活動や思想的背景を考察した青山学院編（氣賀健生著）『本多庸一』（1968年、三五堂）（2012年改訂）<sup>2</sup>が代表的なものとして挙げられる。それまで本多に関する体系的な研究がなされていなかった中で、氣賀は多岐にわたる資料収集とその丁寧な分析を基盤としてまとめ、その後の本多研究を進展させるきっかけをつくったという意味において、功績が大きい書である。その後、キリスト教学や教育学的観点などからの研究が進み、近年に限って言えば、本多の陽明学的素養に着目した、嶋田順好による論考<sup>3</sup>や、教育史的文脈から本多の教育観を考察した、酒井豊による論考<sup>4</sup>が発表されている。

しかし、本多に関するこれまでの研究を探ってみると、本多の果たした功績に比してさほど多くないといえる。その理由としては、本多に関する資料の少なさが第一に挙げられる。それは、1901（明治34）年（本多52歳）、青山の自宅が火災で全焼したためであると考えられる。このことについて氣賀は、「この火災によってかれの説教や演説の草稿はじめ日記・記録類の一切が烏有に帰した。本多の伝記は勿論、日本キリスト教会史にとっての、貴重な史料の数々がこの時失われたのである。」<sup>5</sup>と述べている。

---

<sup>2</sup> 青山学院による本多庸一召天100周年記念事業の一環として、青山学院『本多庸一』編集委員会 編『本多庸一 -信仰と生涯-』として改訂。本論文で引用する際は、改訂版を用いた。

<sup>3</sup> 「本多庸一における陽明学的なるものの影響について」青山学院大学宗教研主任会編『キリスト教と文化』（27）（2012年）

<sup>4</sup> 「本多庸一と日本の高等教育の基礎 - その私立学校観とキリスト教観が示唆すること」青山学院大学総合研究所総合文化研究部門キリスト教文化研究部研究プロジェクト編『キリスト教大学の使命と課題』（2011年、教文館）

<sup>5</sup> 青山学院『本多庸一』編集委員会 編『本多庸一 -信仰と生涯-』（2012年、教文館）

また本多はその生涯において、自らのキリスト教観などの思想を書としてまとめ、発表していない。たとえば植村正久や内村鑑三、海老名弾正らが自身の神学論を著し、それらが現在においても研究されている一方で、本多研究が、とりわけ神学的観点からの研究が多くはないことはやはり、自らの思想を体系的に著していないことに理由を求めざるを得ない。

このように、本多の思想や実践の研究は、資料の制約が非常に大きい中でおこなわれているのが現状である。

## 1-2. 問題の所在

本論文は、本多庸一の神学教育とキリスト教教育について、特に彼の青山学院での初期における実践を中心に考察し、その特質を明らかにすることを目的とする。本多は1887(明治20)年9月から一年間、青山学院の前身である東京英和学校校主兼教授、青山美以教会牧師を務めた後「宗教教育の視察が目的」<sup>6</sup>で、1888年9月から1890年6月までの間アメリカに留学したが、帰国後、青山学院院長に任命された際、「是迄は己の方法に由って伝道して来ましたが、今よりは己の方法を棄て、全く教会の方法に由って主に忠義を尽くします」<sup>7</sup>と語った。すなわち青山学院における本多の初期の実践には、それまでの「方法」ではないメソジスト「教会の方法」による実践を行う方針を示していることから、この時期の実践を考察することは、本多のキリスト教観、特にメソジスト観の特質を明らかにすることにつながるだろうと考える。

本多は、青山学院院長を務めた1890年から1907年までの17年間に於いて、予備学部(1896年に尋常中学部、1900年より中等科)や高等普通学部(1900年より高等科)、神学部(1904年より神学科)の講義も担当した。

本多の在職期間に青山学院神学部とともに教鞭をとった山田寅之助は、本多の神学観について、次のように述べている。

「先生には素より学者風の人ではない、先生には哲学もなければ、神学もな

---

p. 159

<sup>6</sup> 青山学院編『本多庸一先生遺稿』(1918年、日本基督教興文協会) p. 5

<sup>7</sup> 同上 p. 6

い。信仰は極めて単純である。神学問題の起る毎に、『僕は神学者でなければ、君等に頼むよ、けれども僕とても極端なる正統派ではないよ』と云はれて居つた。余は先生より何等神学上の知識を得た事がない。けれども先生には一種云ふべからざる力があつた。』<sup>8</sup>

山田によると本多自らが「神学者」ではないと語ったとともに、山田も本多について「哲学もなければ、神学もな」く、「先生より何等神学上の知識を得た事がない」と率直に評している。

また、後に青山学院院長を務める高木壬太郎は、「贖罪論」に関する本多の「教訓」を聞くため訪ねた折のことを、次のように述べている。

「明治二十五年の頃一日先生を青山に訪ひ、当時疑問を抱き居りし贖罪論に就きて先生の教訓を請ひたりしに、先生は『僕はそんなむづかしい神学上のことは少しも知らぬ、どうか適当の人にお尋ねください』と言はれたりき。自今（分）は一面には意外に感じ大いに失望した」<sup>9</sup>

このように、本多自身の理解はもちろん、当時本多の周囲にいた人物の理解をみても、本多の神学に対する向き合い方は、きわめて消極的なものであったといえる。では、こうした神学に対して消極的なスタンスをとった本多は、神学教育、キリスト教教育をどのように考え、どのように実践したのだろうか。その疑問を解くために、まずは本多の唱えた青山学院の指導精神とも呼べる言説をみてみたい。

## 2. 本多の神学教育、キリスト教教育のテーマ

本多は東奥義塾塾長を辞任後、弘前美以教会牧師、仙台美以教会牧師を経て、1887（明治20）年9月から一年間、青山学院の前身である東京英和学校校長兼教授、青山美以教会牧師を務めた。そして先述の通り「宗教教育の視察が目的」

---

<sup>8</sup> 山田寅之助「大なる常識的人物」『護教』第1079号（1912年4月5日）

<sup>9</sup> 高木壬太郎「追懐」『護教』第1079号（1912年4月5日）

<sup>10</sup>でアメリカに留学した 1889 年、青山学院教授兼幹事であった松島剛に宛てて書いた手紙に、次のような記述がある。

「日本の各学校各教会よりは色々な人物貴器多く出づべし。神学の新説等は京都又は白金辺より将来何程湧出るやも知るべからずとも、さまで羨むことにはあらず。希くは神の恵により我輩の学校より所謂 Man を出さしめよ Man の資質多くあるべしと雖ども Sincerity, Simplicity 最大切なるべし、日本には此種の人将来愈々其必要を感じる事あるべし。米国の教会右の二質は美会とバプテストに尤も多く見へコングリゲーション、プレスビテリアン、エписコパル杯には Propriety, Refinement, Seriousness 杯いふ趣きがある様見受け申候。」<sup>11</sup>

「日本の各学校各教会」からは様々な「人物貴器」が世に輩出され、「京都」すなわち同志社、「白金」すなわち明治学院からは、「神学の新説等」が「将来何程湧出る」かしれない。そのことを羨むことはないと言主張した本多は、「我輩の学校」である青山学院からは、“Man”を出さなければならないとし、その“Man”には、“Sincerity, Simplicity”という資質が「最大切」であること、この二質を備えた“Man”は将来の日本に必要であることを強調した。さらにこの資質は、キリスト教の教派として「米国の教会」における「美会」すなわちメソジスト派に多く見受けられるものであるとも述べた。

このように本多は、メソジスト派に属する青山学院の教育は、メソジスト派の特質である“Sincerity, Simplicity”を資質として備えた“Man”を育成することであると、非常に端的に且つ奥深い言葉で定義した。氣賀健生はこの言葉を「本多の青山学院長としての指導精神であった」<sup>12</sup>と、本多の 17 年間にわたる教育活動の核心と位置付けている。執筆者は、この本多の青山学院における指導精神を彼の神学教育とキリスト教教育観を明らかにする鍵概念と位置付け、それを紐解くために、次に彼が青山学院の教員として行なった具体的な教育活動を

---

<sup>10</sup> 青山学院編 前掲書 p. 5

<sup>11</sup> 岡田哲蔵『本多庸一伝』(1935 年・日独書院) p. 87

<sup>12</sup> 青山学院『本多庸一』編集委員会 編 前掲書 p. 215

考察していくこととする。

### 3. 本多の青山学院における神学教育とキリスト教教育

本多の院長在任当時に青山学院で行われていた神学教育とキリスト教教育を考察するために、内容的に現代の授業要覧に相当する『東京英和学校一覽』を中心に分析していきたい。

『自明治二十五年至明治二十六年 東京英和学校一覽』ならびに『自明治二十六年至明治二十七年 東京英和学校一覽』によると、本多は院長として学校経営の任に当たった他、神学部学生には「説教学」「牧会神学」を、予備学部と高等普通学部の学生には「倫理」を教授していることが示されている。

本多の「説教学」「牧会神学」は、教授の際、前者は「マクレー」の著書をテキストとし、後者については「口授」として特にテキストは使用していなかった。本多がどのような目的をもってこうした講義を行っていたのか、自ら語る資料はみられないが、学生として講義を受けた三浦泰一郎は、「先生の神学校に教授たりし時も、先生の組織神学も、説教学も、其学其術を教へしに非ずして、其品性を学ばしめたりしなり」<sup>13</sup>と語るように、いわゆる学問としての、知識としての神学よりも、講義を通して学生の「品性」を培うことを目的に据えていたと捉えられる。

また、本多が予備学部と高等普通学部で担当した「倫理」で使用した「倫理用書」は、各部、各学年によって以下の通りに示されている。

倫理用書		毎週授業時間
予備学部第一年級	福音講義、信仰之理由等	三
同 第二年級	四福音、証拠論	三
同 第三年級	使徒行伝、真理一斑、基督伝	三
同 第四年級	四福音、マン、チフ、ガリリー、基督ノ姿	三
高等普通学部及師範科 第一年級	聖書書翰、聖書十九世紀	三

<sup>13</sup> 三浦泰一郎「先生寧ろ父たりし人」『護教』第1079号（1912年4月5日）

同 第二年級	基督教証拠論	三
同 第三年級	教会歴史	三
同 第四年級	聖書、有神論	三

この表をみると、全ての学年において「聖書」をはじめとするキリスト教関連の書を使用していることが看取される。したがって本多は、学生にキリスト教の講義を通して「倫理」を教授していたと理解できる。そしてその具体的方針について本多は、「基督教主義倫理科教授法的一端」と題する講演で次のように述べた。

「由来倫理科は何れの学校に於ても困難であった。基督教の学校は精神教育を特徴とするも単に聖書を教ふるのみでは適當ではなく、日本の倫理、特にその道徳的行為と人物を知らしむるの要あり。基督教を教ふるにも証拠論などを出して徒らに議論するより基督及び聖徒の伝記などにより、模範を示し漸次教義に入るを可とす」<sup>14</sup>

「何れの学校に於ても困難」な課題とされる「倫理科」について、「精神教育」を特徴とする「基督教の学校」は、単なる「聖書」の教授のみならず、「道徳的行為」と「人物」に主眼を置いた「日本の倫理」を教える必要があると述べた。さらに、「倫理科」で「基督教」を扱う際は、「基督」や「聖徒」の「伝記」を通して彼らの人格、行ないを「模範」とした上で、教義を教授するべきであるとの方針も示した。

この主張について、本多の薫陶を受け青山学院でもともに教員を務めた岡田哲蔵の言によると、「彼（筆者注…本多）は実践を主眼として誠意を以て指導せば、無効などいふことなしと信じて居」り、「倫理科教授」における「実践」の姿勢は「後に至るまで久しく続いた」と述べていることから、本多の方針は、青山学院で教鞭をとっている間は一貫していたといえよう。

こうした教育は、たとえば本多が「神学の新説等」の現出が期待されると述

<sup>14</sup> 岡田哲蔵 前掲書 pp. 102-103

べた同志社においては、予備学部「修身」では内容として「聖書講義」が、普通学部「修身」では、第1学年から第3学年までは「聖書」、第4学年から第5学年までが「基督教証拠論」が教授（いずれも週の授業時数は1回）されていた<sup>15</sup>ことと比較しても、特徴的な教育カリキュラムと捉えられる。

このように講義を通じた教育の他に、本多は課程外においても積極的にキリスト教育を実践した。1894（明治27）年に高等普通学部3年科を卒業した黒川新次郎の回顧文には、院長である本多が中心となって進めたキリスト教教育活動の一端が詳細に記されている。

「当時の青山は学問をする学校たると同時に全く精神修養の場所であったと云ひ得る。然してその中心となって居られたのは、何と云っても当年の校長本多庸一先生であったことは申す迄もない処である。其頃の青山学生々活は、頗る忙しいものであった。一面孜々として勉強もするが、他方には、ウキークデーでも随分宗教的会合が多かった。殊に日曜などには、朝は組合があつて、本多先生のお宅か、外国人の先生の所へ行く、終れば長者丸の食堂へ行く。午後は『ガウチャーホール』における学校の教会、之に続いて神学校における英語説教、夜は祈祷会是等に全部出席すれば、平日よりも尚忙しいという有様であった。要するに人物修養の機会は、随時に与へられ、又随所に与へられて居った。」<sup>16</sup>

本多は自ら中心となって、自身や外国人宣教師の自宅、教会での説教、祈祷会といった「宗教的会合」を頻繁に行なっていたことから黒川は、青山学院について「学問をする学校」とともに「精神修養の場所」であったという印象を強く抱いている。実際、『自明治二十六年至明治二十七年 東京英和学校一覽』の「各部通則」の項目には、「毎日曜日学校ノ講堂ニ於テ説教及日曜学校アリ 学生ハ之ニ出席センコトヲ望ム」という文言が記されている。すなわち本多は、

---

<sup>15</sup> 「同志社学院（予備学部 普通学部 神学部）規則（明治二一年六月改正）」『同志社百年史 資料編 一』（1979年）pp. 381-382, pp. 390-391

<sup>16</sup> 黒川新次郎「東京英和学校時代の回顧」『青山学報』第147号（1936年11月30日）p.7

青山学院において人格的接触を通じた「人物修養の機会」を学生に与えることを重要視していたことが理解できる。

### 3. 本多の説教にみる「基督主義」教育論

青山学院の教員として行なった本多の具体的な教育活動の思想的背景を探るために、次に本多が神学教育、キリスト教教育について語った「教育の二大目的」、「基督主義教育の必要」と題する説教（両説教とも日時・場所不明）を紐解きながら考察を進めていきたい。

本多は「教育の二大目的」として、「一. 善き人間を作ること 二. 善き国民を作ること」<sup>17</sup>を挙げ、目的達成のために次のような主張をした。

「善き国民は国力の大原素なり。」<sup>18</sup>

「善き国民は善き人間たるを要す。故に徳育最も必要なり。而して徳育は宗教を要す。」<sup>19</sup>

「国力の大原素」となる「善き国民」は、「善き人間」でなければならない。そのためには「徳育」が最も必要であり、その「徳育」には「宗教」が必要である。こうした論理で、本多は教育目的達成のために、宗教教育が必要であることを訴えた。

では、数ある宗教の中でもなぜ「基督主義」の教育を必要としたのであろうか。本多は「他教の主義を尋ねて論究する之違はなし。直裁に我所謂基督主義を概述して日本の必要に及ばん」<sup>20</sup>とし、「基督主義」について論じ進める中で、その教育の必要性を明らかにしようとした。本多は、自身が定義する「基督主義」を次のように述べた。

「基督は積極に消極に高貴なる教訓を施されしも、帰する所は力を尽して天

---

<sup>17</sup> 青山学院編前掲書 p. 195

<sup>18</sup> 同上 p. 195

<sup>19</sup> 同上 p. 196

<sup>20</sup> 同上. 192

父の意思を行ひ、己の如く隣人を愛するを以て中心とす。縮言すれば克己献身他の為に生死する事なり。此の献身を徳の理想として倫理道徳を立つるは、基督の倫理、主義なるを信ず。以上は或人の意に合ふも合はざるも吾人が基督主義と信ずる所なり。」<sup>21</sup>

キリスト教の「中心」は、キリストが説いた「高貴なる教訓」ではなく、「力を尽して天父の意思を行ひ、己の如く隣人を愛する」という「克己献身」であると本多は捉えた。このキリスト教の「中心」である「克己献身」を「徳の理想」として立てた「倫理道徳」というものが、「或人の意に合ふも合はざるも」本多が定義するところの「基督主義」であった。

ここで注目すべき点は、本多が、「基督主義」という一般的に使われる語ではなく、「基督主義」という言葉を用いていることである。本多は、「基督主義と云はざるは微意あるなり」<sup>22</sup>としてその理由を次のように説明した。

「所謂基督教と称する者には種々なる派もあり、儀式もあり、教義もあり、相互ひに容れざるものあればなり。」<sup>23</sup>

「基督教」には様々な「派」「儀式」「教義」があることにより、解釈はそれぞれで異なるものであると本多は捉えている。「或人の意に合ふも合はざるも」と前置きした上で「基督主義」を定義していることからそれは明らかである。このことから発表者は、本多が「基督主義」ではなく、「基督主義」としたところに、本多自身のキリスト教解釈が表れているのではないかと推察する。

本多が「基督主義教育と称する者」<sup>24</sup>は、先述の「基督主義」を「造次も顛沛忘るゝことなくして教育を実行」<sup>25</sup>することであった。

---

<sup>21</sup> 青山学院編前掲書 pp. 192-193

<sup>22</sup> 同上 p. 192

<sup>23</sup> 同上 p. 192

<sup>24</sup> 同上 p. 193

<sup>25</sup> 同上 p. 193

## 5. おわりに

本多が実践した青山学院という「基督教の学校」における神学教育とキリスト教教育は、キリストが説いた「高貴なる教訓」の教授といったいわゆる神学的・キリスト教学的知識の注入ではなく、「道徳的行為」や「人物」を中心とした「日本の倫理」を重要視し、「基督」や「聖徒」の「伝記」で「模範」を示すことを基礎に据えた「基督教」を内容とした「倫理学」を教授したり、人格的接触を重んじて「随時」かつ「随所」に「宗教的会合」を行ったりすることであり、そうした実践によって、青山学院における教育の核心として掲げた“Man”の育成に尽力したのであった。

その背景には「克己献身」をキリスト教の中心とする本多のキリスト教観が表れており、それを実践する教育が、本多の定義するところの「基督主義」教育であることを考察してきた。

このようにみると、「キリスト」が実践したように自らも「克己献身」することを何よりも重要視したという、「高貴なる教訓」に拘泥しない本多のキリスト教観を、山田寅之助が本多の「信仰は極めて単純である」と言明したのも首肯できる。本多が定義するところの“Man”とは、メソジスト派の特質である“Sincerity, Simplicity”を資質として備えていると述べているが、本多の神学教育・キリスト教教育観、それを基軸とした教育実践は、やはりメソジストの特質、さらにいえばジョン・ウェスレーの思想的影響を受けたものであると推測される。

また、本論文では、主に 1889 年頃から 1893 年頃の本多が院長を務めた初期の実践を中心に考察をしたが、先述した岡田哲蔵のことばにある通り、日本メソジスト教会監督就任のため院長を辞する 1907 年まで、この教育観と実践は終始一貫していたといえる。それは、17 年間務めた青山学院を辞する際の送別会にて本多が教員や学生らに向けて述べたメッセージにおいて、

「特に諸君に望むところは、学校の宗教教育（傍点ママ）一層の力を込められんことなり。今日は人数増したれど、果して職員も生徒も学校の本領の為に十分に尽しつつありや、若し宗教教育の効果現はれずば、形体の大なるも

喜ぶに足らず。諸君乞ふ大に信念の涵養品性の発達につとめられよ」<sup>26</sup>

と、「形体」としての宗教教育に満足することなく、「信念の涵養」「品性の発達」に力点をおくことを強調していることにも明らかであろう。こうした主張は、今回対象とすることができなかったその後の教育実践や、それに関わる言説などの考察を通して、より深く捉えていきたいと考えている。

(青山学院大学 教育人間科学部 教育学科 准教授)

---

<sup>26</sup> 「青山学院と本多院長との別離」『護教』第 830 号（1907 年 6 月 22 日）